

2015年1月25日 主日礼拝
説教「ヨシュア物語④ 神さまに仕える決心」
ヨシュア記 24章 14-15節

【ギブオン事件】

ヨシュアの生涯は、神さまのあわれみを体験し続けた生涯。そのひとつに、ギブオンの事件があります。聖絶を恐れたギブオンは、遠くから来たように装って、イスラエルと盟約を結ぼうとしました。ヨシュアたちは、そのとき「主の指示を仰がな」(9:14) いで、大きな失敗をしてしまいます。さらにその結果、ギブオンの人々を奴隷にするという中途半端な処置を行うことになってしまいました。ところが、神さまはギブオンもイスラエルも罰しておられません。むしろ、このことを通して、イスラエルのカナン征服を一気に進めさせられました。

イスラエルを欺いたギブオンも、神さまは受け入れてくださいました。最初は欺きから神さまの民に加わろうとしたのだとしても、やがてほんとうに、心からご自分を愛する心がギブオンの人々にも生まれることを、神さまは願われていたのです。

【ヨシュア 110 才】

自分の死が近いことを感じたヨシュアが最後に言い残したことは、「今、あなたがたは【主】を恐れ、誠実と真実をもって主に仕えなさい」(14) でした。誠実は行いと心が一致していること。真実は言葉と行いが一致していること。

だから「誠実と真実をもって【主】に仕えなさい」とは、心と言葉と行いをもって神さまに仕えること。自分の存在全部で、神さまに仕えることです。律法を中心「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい」(申命記 6:5) を思い出させます。ヨシュアはイスラエルに神さまを愛するように迫ったのです。神さまの愛を心に刻んで、神さまを愛するようにと言い残したのです。

【共に働く神】

それにしても、聖書は不思議な書物です。聖書の神さまは不思議な神さまです。全能の神さまが、ご自分を愛するようにお命じになるのですから。私たちの神さまは、私たちが神さまを愛することを、ほんとうに喜んでくださる神さま。全能なのに私たちと共に働くことを好まれる神さまなのです。

【民の誓い】

ヨシュアの問いかけに、民は誓うのですが、ヨシュアはなんとも胸をつかれるようなことを言わなければなりません。「あなたがたは【主】に仕えることはできないであろう」(19) と。ヨシュアは、イスラエルの誓いが破れることを予感していたのです。

しかし、ここでも、また不思議なことが、起こりました。民がもう一度「いいえ。私たちは【主】に仕えます」(21) と繰り返したとき、ヨシュアは、今度はその誓いを受け入れたので

す。破れる誓いであることを知って受け入れ、神さまもそれを、よしとされたように見えるのです。実際には、イスラエルはやっぱりこの後も、偶像礼拝を繰り返します。【主】に仕えることができなかつたのです。それなのに神さまは、ここでイスラエルの誓いを受け入れてくださいました。

そこには神さまの二つのご覚悟がありました。ひとつは、イスラエルを愛し抜く覚悟。たとえイスラエルが、どんなに不従順であったとしても、その背きを忍び抜き、愛し抜く覚悟です。私たちもまた、どんなに不忠実であっても、神さまに愛され続けるのです。ほんとうに申し訳ないようなことですが、神さまは私たちが問題をかかえていればいるほど、私たちを愛してくださいます。だから罪を犯したときも絶望してはなりません。神さまの愛が私たちから離れたなどと、考えてはならないのです。

神さまのもう一つのお覚悟は、イスラエルが犯す背きの罪を、全部ご自分がお引き受けになる覚悟でした。神さまが裁きを曲げて、いいかげんにしたというわけではありません。そうではなく裁きをご自分がお引き受けになったのです。御子イエスの十字架で。神さまは私たちの罪も引き受けてくださいます。だから私たちは何度でも何度でもやり直すことができます。こんな神さまを、私たちも愛さないではいられません。仕えないではいけないのです。